

文春図書館

今週の必読

『暴力と不平等の人類史』 ウォルター・シャイデル 鬼澤忍・塩原通緒訳

流血の大惨事抜きで格差解消の難しさ

【評者】山形浩生

本書の主張は簡単明快。

これまでの世界では、経済格差が縮まるには、常に流血の大惨事が必要だった、ということだ。戦争。革命。文明崩壊。疫病。数十万人単位で人が死ぬくらい社会が激変でもしないと、金持ちが既得権益や財産を手放したりはしない！

2014年にピケティ『21世紀の資本』がベストセラーとなったことからわかる通り、経済格差の拡大は現代社会の大きな課題として懸念されている。本書は多くのデータや既往研究をもとに、石器時代以来の各種社会における経済格差の状況と、その背景にある力学を描き出す。社会が安定して豊かになると、どこでも必ず格差は開く。そ

して、それが縮まったわけかな事例は、必ず死と暴力に彩られる！

それを嫌と言うほど描き出した挙げ句、「願うことには注意しよう」という一文で本書は終わる。つまり、血みどろの騒乱と殺戮を引き起こす度胸もななくせに格差縮小とか口走るな、と著者は嘲笑しているのだ。開発援助分野の評者としては、露骨にケンカを売られてはいるわけで、心穏やかではない。だからかなり肩にツバをつけたつ読み進んだ。著者の議論はあまりに大風呂敷では、特に19世紀から20世紀の、社会経済のあらゆる面での大変化はどうなんだ？ 石器時代と同列に扱っていいのか？ 人口変化も生活水準も人権意識もすべて変わった現在の格差の力学だけが同じなの

か？ だがもちろん、評者がすぐ思いつく程度の反駁は、著者もきちんと議論を展開していた。社会騒乱なしの各種格差解消要因が、実にシヨボいものでしかなかったことを、本書はグリグリ描き出す。人は強欲で自分だけはおかしい。善意や社会の良心に頼るやり方は、どうしても限界があるのだ。

ではどうしようか……と。言っても、本書には格差解消のための名案が出たりしているわけではない。そして急に人々が格差解消に目覚める可能性も完全に否定するわけではない。でもそれが奏功する可能性がいかに小さいことか。

ただ「つだけ本書の議論への批判を。いま、世界の格差では奇妙なことが起こっている。各国の国内格差

は拡大している。そして国内士の格差も開いている。でも、世界の全人口で見ると、実は格差は縮まっているのだ。

なぜそんなことが？ それは過去数十年で、それまで世界でもっとも貧困者の多かった中国とインドが急激な成長を遂げたからだ。そしてこの二国は巨大だから、この二ヶ国で貧困者が大幅に減り、所得階層が上がったことで、世界の所得分布は均等化した。すると実際には、どういう単位で格差を考えるかで、著者の考えていないような形で格差解消が進む可能性はそれなりにあるのでは？ 底辺社会の急成長が大きな要因になるのでは？

やまがたひろお/1964年生まれ。評論家・翻訳家。主な訳書に『ピケティ「21世紀の資本」』、『ス・ナチス 破壊の経済』など。

東洋経済新報社 5400円+税
Walter Scheidel/オーストリア生まれ。ウィーン大でPhD(古代史)を取得。現在カリフォルニアのスタンフォード大学人文科学ディカソン教授、古典・歴史学教授、人類生物学ケネディ・グロス

要再校

FD

マン・フェロー。近代以前の社会：経済史など。著書は多数。

だがそれで、現状の社会の難しきについて、本書は内部の格差解消が不要になり、きわめて精緻な(だが厳し)実像をつきつける。それは通れないだろう。